桐野夏生の『グロテスク』

――テクスト装置としての書簡、手記、日記

安倍オースタッド玲子

中川先生と『グロテスク』

つい数週間前、Facebookに「5年前の今日、あなたはこんな写真に写っていました」という知らせが入り、お互いに少し若かった中川先生と私がおそらくEAJS（European Association for Japanese Studies）の学会でそれぞれ別の人とおしゃべりしている写真がモニターいっぱいに拡がりました。そうです、中川先生との思い出はまず、ヨーロッパ各地で開催されるEAJSの日本研究学会での出会いから始まりました。ブダペストが最初であったような気がしますが、ポーランドのワルシャワ、イタリアのレッチェ、エストニアのタリン、スロベニアのリュブリャナでもご一緒させていただきました。中川先生ご自身の発表や他の研究者たちのパネル内容、最近の小説、近況などを話題に、学会会場だけでなく、それぞれの街の趣を味わいながら、カフェやレストランでたくさんの楽しく有意義な時を過ごすことができました。最近では漱石没後一〇〇周年記念の企画などの関係でアメリカでもお目にかかれる機会がありました。もちろん東京や京都でもお会いしているのですが、中川先生というとやはり印象が強いのはエネルギッシュに海外で活躍されているお姿です。

そんなEAJSの学会でのある日、中川先生がディスカッサントを務められた桐野夏生についてのパネルの後、「面白い、絶対お奨め、もう読んでしまったから、どうぞ」と言って、文庫本の『グロテスク』をくださいました。それが私の『グロテスク』との最初の出会いだったのですが、数年後にパリで開かれた「書簡性」をテーマにした学会で『グロテスク』について発表し、『日本学：テクストとコンテクスト』という論文集に入りました。[1] これはフランス語訳の寄稿だったので、今回、改めて日本語の原稿を載せていただく機会が得られて有りがたく思います。私自身の女子校体験と重なるところが多いこの作品についてゆっくり考えることができ、中川先生には感謝しています。これからも先生と読書や映画鑑賞を通じて、人生について、世界について議論し、ともに考え、歩んでいけたらと思っております。中川先生、これからもよろしくお願いいたします！

ジャンルとしての書簡小説、書簡性と『グロテスク』

二〇〇一年から二〇〇二年にわたり『週刊文春』に連載し、二〇〇三年に単行本として出版された桐野夏生の『グロテスク』。一九九七年のいわゆる「東電OL殺人事件」として知られる殺人事件に取材した話題性のため、世間の注目を浴びた作品である。しかし文庫本の解説で斉藤美奈子が示唆しているように、読み始めると途端に多くの読者はそんな事件のことはすっかり忘れて物語に引き込まれてしまう。この物語は同じ

Q女子高校の卒業生である四人の女性を中心に展開し、主にそのうちの一人（仮に主人公と呼ぼう）、殺された美貌の売春婦、平田ゆり子、の姉によって一人称で語られるのだが、彼女の語りは彼女が小説内で読むゆり子の手記、Q高校時代の恩師の手紙、ユリコと同じように売春をしていてユリコの事件から一年後に殺された同窓生和江の日記、（それぞれ当然のことながら一人称）、などによって相対化され、その相対化に抵抗するかたちでさらに発展する仕組みになっている。人事とは思えないように読者を強引に引き付けていく主人公「私」、のダイアロジックな現在進行形の語りはこの小説の「書簡性」と呼んでよいのではないだろうか。ジャネット・アルトマンによってジャンル化が試みられたテクスト装置としての「書簡性」の概念を参考にしながら、『グロテスク』の語り口が読者の読みにどのような影響を与えているかについて考えていくことが本稿の趣旨である。[2]

アルトマンの語りの「書簡性」の定義で特に『グロテスク』の分析に有用であると思われる事項を四つほど挙げてみたい。第一に語りに特定の「宛先」があること。「私」の語りは形式的には手紙ではなく、固有名詞の宛名はない。だが、彼女の常に読者を意識した「書簡的」な語り口に「世間」という宛先があると考えることは可能だ。

ユリコと和恵の事件のせいで、わたしの生活もすっかり変わりました。見ず知らずの人たちが二人の噂話をし、わたしの生活を覗き見、わたしに無礼な質問を浴びせるのです。わたしはうんざりして、口を閉ざしてしまいました。誰にも何も話しませんでした。

最近はようやく身辺も落ち着きました。わたしも新しい職場を得ましたしね。そうしたら急に、わたしはユリコと和恵のことを誰かに話したくてたまらなくなりました。だから、遮られても喋り続けるかもしれません。父もスイスにいますし、ユリコが死んで独りぼっちになってしまったから、話相手が欲しいという気持ちもあります。しかし、本当は、わたし自身がこの不思議な出来事を考えたいのかもしれません。長くなるかもしれませんが、昔の和恵の手紙なども残っていますから、包み隠さずお話しいたします。（上一八）

彼女の語りは、「怪物的」美貌をもった妹ユリコとの長年の確執、そしてそのユリコや同級生和恵の死によってあらたに自分が「世間」の好奇心に満ちた目にさらされることによってもたらされた精神的危機に対応するため、半ば釈明のため、半ば自己探求のため書かねばならなかった、常に「生活を覗き見」し「無礼な質問を浴びせる」世間に宛てられた「手紙」と考えてもよいだろう。アルトマンが言うようにソール・ベローの『Herzog』で、主人公のHerzogが精神的危機をのりこえるために、手当たり次第に昔の知人（死んでしまったものも含む）に宛てて書き始める「訴え」の手紙にも似た形で、「私」は「世間」にむかって、ひたすら「手紙」を書く。[3]長年培ってきた「悪意」の結果、手紙を書いても返事をくれるような友人、知人、親戚をもたない「私」は「世間」の「返事」を常に想定し、射程にいれながら、自分の立場を釈明するかたちで書き続ける。「世間」が、彼女の想像力のなかで不可知の「他者」として、アルトマンの言う〝shadow confidant〟（闇の腹心）の役割を果たしていると言える。

第二に「書簡」の言葉がもつ、「現存在」と「即時性」を重視する、口承をモデルにした文体。

犯人が憎いかとおっしゃるのですね。いえ、父と同様わたしは真相などどうでもよかった。……冷たい態度と思われるでしょうね。（上

一六）

常に介在する「書く時」と「読む時」のギャップを埋めるように、「書簡性」をもった言葉は語るという行為があたかも今ここで起こっているかのごとく、みせかけの「現在」を装う。

第三に、小説内で「手紙」が書かれ、読まれ、それが主人公および他の登場人物（手紙の作者が意図していた読み手以外の人物も含めて）に解釈されることによって物語の発展そのものが左右されること、これをアルトマンは書簡小説が前提にする書簡の「相互性」と呼んでいる（彼女の説に従えば形式は手紙であっても、読み手の反応や解釈がまったく射程に入っていない小説は書簡性を持つとは言えない）。そして第四にこの書簡の「相互性」が必然的にもたらす時間の重層性（temporal polyvalance）。『グロテスク』の場合、主人公「私」、の「世間」に向けた語りのスタンスが小説内で読まれる手紙や手記によって徐々に相対化され、そのことが過去への記憶を喚起し、さらに微妙に変化していく様子が、現在進行形で、語りそのものに組みこまれていく。そして進行中の語りのなかに、同じ手紙や日記を読んだ他の登場人物の解釈や過去への思いがフラッシュバックとして織り込まれ複数の時間軸が交錯する複雑な時空を作りあげている。このように『グロテスク』は書簡小説に多くみられるダイアロジカルで現在進行形な語り口、そして、それに伴う、複雑で重層的な時間の配置に特徴づけられる「書簡性」をもった小説だということが言える。

ただし、彼女の手紙が宛て先である「世間」一般にどう解釈されるかは、定かでない。ユリコの姉の手紙の行く先は彼女の意図とは独立した軌道にのるであろうことが想像される。なぜなら、彼女の語りは他の三人の女性やその他の登場人物が手記、日記、書簡を通じて語るストーリーによって、そのコンテクストを少しずつずらされ、読者は最初の解釈が脱構築され、宙吊りになっていく様子を目の当たりにすることになるからだ。

「書簡性」が後押しする物語の展開

ここで物語の展開にそって、その具体的な過程をみていくことにしよう。ユリコの姉が「世間」に向かって語り始める、小説が始まる時点の「現在」はユリコが死んでから二年、和恵の事件があってから一年たった、おそらく一審の初公判を前にひかえたいつかと考えてよい。④そこでまず語られるのはユリコの姉が「世間」に知っておいてもらいたい原体験とも言える過去のある事件についての感情のこもったフラッシュバックである。彼女の自己認識がいかに美しいユリコとそうでない自分とを比較する「世間」の差別の目と言葉によって形作られてきたかを如実に物語るエピソードだ。二人は同じスイス人の父と日本人の母の間にできた実の姉妹であるにもかかわらず、全然似ていない。姉の「私」は醜く、妹は家族の誰にも似ず、美しい。「私」は母似で体系も日本的でずんぐりしているが、妹は西洋的な意味で容姿に恵まれている。中学校に入った間もないころ家族が正月休みにすごす、山小屋の近くの露天風呂でのできごとが語られる。

脱衣場で着替えていると、早速囁きが聞こえてきました。

「ほら、あの子見て」

「お人形さんみたい」

脱衣場でも、廊下でも、湯気の向こうでも、女たちがこそこそ話しています。あからさまにユリコから視線を外そうとしないおばあさんや、驚いた顔を隠さずに肘でつつき合う若い女たち。子供などは

わざわざ近寄って来て、ユリコが裸になる様をぽかんと口を開けて見ている始末です。

見られることに慣れっこになっていて、さっさと裸になるユリコ。人の視線を意識して、「下着を脱ぐのがいやだなと考えて」「下をむく」姉。「ご主人は外人さんなんですか」と無遠慮に聞く女。他人の目線にさらされながら、湯の中で「ユリコちゃん」という母の呼びかけに「お母さん」と答えるユリコ。「ユリコの澄んだ声が響き、視線が素早くわたしと母とに集まりました。それからユリコに集中し、またわたしたちに向かってきます。見比べる視線。溢れる好奇心。素早く下される優劣の判断。わたしは知っているのです。ユリコは、母親と姉は自分と違うということを周囲に知らしめるために、母にこたえたのです。そういう妹だったのです。そうです。わたしはユリコを愛したことなど一度もありません。」（上三四）。

「私」は自分の持っている資質がユリコと比較される限り「世間」の優劣の基準から常に疎外されるだろうことを幼くして身をもって思い知らされ、ジュディス・バトラーの言葉を借りれば、いわば人間として承認されない、被差別者的存在として自分を自覚する。[5] この被差別感は温泉の後の大晦日のパーティーで決定的になる。ハンサムなアメリカ人のビジネスマン、ジョンソン、とその美しい日本人妻、マサミ、が持つ山小屋に日本人妻をつれた西洋人の男たちが集まり、にぎやかに過ごす。そこでユリコは容姿も人となりも冴えない両親を離れて、暖炉の前でくつろぐジョンソン夫妻に一人でかわいがられる。その光景を脇から観察するユリコの姉。美しい絵のようなジョンソン夫妻とユリコのイメージは西洋へのあこがれと日本人としてのプライドを同時に満足させるポストコロニアル的な幻想として、彼女の脳にやきつき、さらにそこから永久に疎外される存在としての自己意識が決定的になる。

夜の帰り道で、ユリコのために自分がまっとうな人間の仲間入りができない理不尽さに対する怒りが姉の言葉を触発する。

「あんた、誰よ。あんたなんか知らない」
「何言ってるの」
「化け物」
ユリコは狂乱したように叫びました。
「ブス」
「死ね」

「化け物」という姉の売り言葉はユリコの「ブス」と言うジュディス・バトラーの言う決定的に「触発する」世間の言葉を姉にむけて発してしまうことになる。[6] この言葉はユリコが必ずしも意図していなかった社会的な力をもって姉を傷つけ、ユリコの姉は、社会で生き延びるということは常にユリコに軍配をあげる世間的な美の基準以外の基準を糧にして生きるしかないということを徹底的に思い知らされる。姉は鋭い観察力、と「悪意」をたよりに生きていこうとするようになる。

第三章で時は語りの「現在」にもどる。一審の公判の一週間ほど前（先日）、二六年ぶりでマサミが「私」の職場を訪れ、「私」はジョンソンから預かったというユリコの日記を渡される。私はそこで「この手記の内容を信じないとお約束してくださるのなら、お見せします。」（上二〇二）と言いつつ、読者にこの手記を公開するわけだが、これはアルトマンの言う現在性を重んじる書簡小説の時間的なジレンマが表出している文章だと言えよう。読者が読んでいる時点では、「お約束」のいかんで、手記をみせないという選択はありえないのが明らかなのにもかかわらず、読

者に「今」語りかけられているのだという現在進行的な錯覚を強いる（一三六・一四〇頁）。

一人称で語られるユリコの手記の「現在」は当然のことながら、ユリコが三六歳で死ぬ二年前以前である。それも容姿が衰え、指名制ではやっていけなくなり、渋谷の円山町で、客の直引きをやるようになり、和恵と一緒に厚化粧にかつらという出で立ちで夜の街角に立つようになってから……つまり殺される時点からみて比較的最近のいつかであったはずである。その「現在」の視点を軸として姉とのトラウマに満ちた幼年時代、Q中学時代、また高校卒業前に退学になってからの生活についてのフラッシュバックが織り交ぜに語られる。彼女の日記はまず、姉から最近用もないのに頻繁に電話がかかってくることにふれ、ジョンソンとの性交中にユリコの姉から電話がかかり、留守電に一緒に住まないかという長いメッセージがあったという場面描写から始まる。姉は「あたしが生まれた時からあたしに嫉妬し、あたしに恋をしているみたいな人よ」と後にユリコが和恵に語る言葉を先取りするかのように（下三六五）、ユリコを見張りユリコの存在に執着しこだわり続ける姉の様子がここで描写される。最初の二章で読者に印象づけられたユリコとはかかわりたくないという姉の突き離すような語りがここで相対化されるのだ。

またさらに姉が語ったばかりの幼年時代についての詳細がユリコの立場から語りなおされる。一人だけ美しく「誰にも似ていなくて、存在自体を疎まれた子供」（上二二〇）であり、母に似ている姉がうらやましかったと語るユリコ。その疎外感は姉がことある事に繰り返す、あんたは川で拾ってきたもらいっ子だよ、と言う言葉によって強められ、母の自殺後、中学生で帰国しても行き場所がなく、赤の他人であるジョンソンとマサミの家に預けられた自分の立場を「ジョンソンが［性的に］私を欲しているだけの」危うい関係と分析する（上二四三）。マサミはマサミで世間体のよいQ高校に通っている、きれいなユリコを玩具的にかわいがるのみであり、人間として「私」に興味や愛情をもっていたわけではない。皆のかわいい「玩具」的存在として、Q高校で、そして他人の家で生きていくためには「主体性をおしつぶす」訓練するしかないと自覚しながらも、心の中だけは自由だ、と言い切る彼女。後にミツルが語る、ユリコさんが一番自由だった、と言う言葉の伏線であるとも言える。

第四章は「わたしの話も聞いてください。ユリコにこんな嘘ばかり書かれてしまっては、口を挟まずにおれません。」と憤る姉の、ユリコの手記を読んだ後の感情的な「現在」の反応を基本にしてつづられる。ユリコの手記に和恵の名が出てきたことによって喚起されるQ高校時代の和恵についてのフラッシュバック。ユリコの手記に刺激されて、攻撃は最大の防御とばかりに、負のエネルギーが一挙に吹き出てくるような「悪意」に満ちた語り口で、彼女たち（ユリコの姉、ミツル、和恵）高校から入ってきたがり勉組が出会った、Q女子高校の差別文化について語られる。良家の子女が多い、エレベーター式に有名なQ大学に進めるQ女子高校の差別文化を分析するユリコの姉の観察はするどい。ユリコの姉や和恵のように受験地獄を生き延びて高校から入ってきた女生徒たちは、受験のためには欠かせなかった勉強や偏差値、「一途の努力」などがいったん高校に入ってからはほとんど価値をもないことを思い知らされる。恵まれた結婚をめざすのがあたりまえの彼女たちにとっては、容姿、センス、服装、などに圧倒的な「文化資本」があり、この価値体系のなかで、またしても「私」が持っている資質は否定されることになる。ここでもまた、受験をせずに特別編入してきたユリコの美しさに、軍配があがるのだ。

そんななかで勉強はできても「ダサくて」仲間はずれになりながらも

自己認識が極端に欠如した和恵にいらだつ「私」が和恵を徹底的に苛める様子が語られる。学年一美男でしかも生物の先生の息子である木島高志に恋する和恵。そんな彼女をそそのかして高志に手紙を書かせる。一通はラブレター、もう一通はロマンチックな自作の詩。その無防備な純情さにあきれながらいいから送れと薦め、返事が来ないとあわてる和恵を観察してたのしむ「私」。「私」は和恵がラブレターを書いたことを恥じて手紙をそのまま封筒にいれて送り返して欲しいと言っていると高志にいつわりの電話をする。「僕はちょっと感動しなくもなかったなあ。特に、あの詩よかったですよ。……初々しくて」（上三七七）と抵抗しながらも和江を特に好きでない高志は納得して手紙を和江の両親の住所に送り返してしまう。彼の「感動しなくもなかった」という気持ちは和恵に伝わらないばかりか「送り返す」という行為そのものが和恵と和恵の父に誤解される。「私」がコンフィダントとしての信頼を密かに裏切ることによって、またラブ・レターが意図した相手以外（和江の父）に読まれることによって秘密が知られたくない人に知られ、その感情的な波紋が思わぬ方向から本人の運命を左右することになる。

この事件は一見、複数の人間に読まれることによって誤解を招くラブレターという使いふるされたパターンをなぞっているとも言えるが、ラブレターを電話という現代的なメディアと組み合わせることによって、「書簡性」がより効果的にドラマを演出している。手紙というメディアには必然的に時間のずれがともない、さらに、相手が何らかの理由で沈黙を保つことによって「返事」が来ない可能性がつきまとう。電話というその場での返事を強要する直接的な手段で「私」が和恵のラブレターの先を越すことによって、高志の返事は永久にインターセプトされ、和恵に届かない。和恵は絶望的な失恋感に打ちひしがれ、この「返事をもらえなかった手紙」は後にだんだん顕著になっていく彼女の拒食症や奇行の間接的な引き金になる。

ちなみにもう一通「返事をもらえなかった手紙」にベルンで自殺する前に母がユリコの姉に書いた手紙があるが、この手紙もまた母と姉の微妙な心のすれ違いを浮き彫りにする。読者に母やユリコたちの近況を知らせる手紙として第一章の終わりに配置されているのだが、母を憎む「私」は返事を書かない。しかし母の死後、手紙にあった一行「あの人たちは私のようなみっともない東洋人がユリコみたいな美しい子を作ったことが不快なのだと思います」を思い出し、自分との共通点に思いをはせ、初めて母を哀れむ気持ちになった、と「私」は言う。ユリコが手記の中でもらす、ベルンで「母の思いは西洋人に近い私より日本に置いてきた姉の方に向かったのだ」と言う、姉を気遣う「母の思い」に姉がこたえられる心情をもつ時点で母はすでにこの世の人ではなくなっているわけだ（上二二〇）。

第六章では初公判に出たユリコの姉が帰りに法廷で昔の同級生、ミツル、に出会う。[7] クラス一の秀才であったミツルは目指す東大医学部に見事合格し、医者と結婚。ところが家族ぐるみでオウム真理教おぼしき、カルト的宗教団体の熱心な信徒になり、教団が犯した殺人にかかわった罪で服役。出所したばかりで、「誰にもあっていない」と言う。「手紙」ではないが、長い間話し相手もなく刑務所で過ごす間、自分の歩んできた人生について考える機会を得、「喋りたくてしかたないの。あたしの話していい？」という前置きとともに、堰を切ったようにあふれ出てくる言葉。刑務所から何度も出した葉書に返事をくれなかった「私」や読者にむかってなされる一連のミツルの告白や訴えの数々は、ユリコの手記とはまた違った視点から、主人公が今までつづってきた物語を相対化する。ユリコの姉にむかって「あなたは嘘ばっかり吐いて生きている」「ユリコさんに成り代わりたいだけの女よ」（下一六一）とはいて捨てるよう

に言い切る。帰り際に服役中にもらったと言う、高志の父である生物の教師、木島先生からの手紙を手渡して読むように薦める。

ユリコと和恵の殺人事件、またミツルの服役の話を聞いて、自分が教育者として失敗したのではないか、と反省する木島の手紙。特に、学力が不足しているのにもかかわらずその美しさにひかれてユリコを独断で編入させた自分の判断の過ちに思い悩み、ユリコと息子の高志が売春行為をしていることを聞いて、二人を退学処分にしたことに関して、心を痛め、「平田さんのお姉さんにだけでもこの気持ちを伝えたいと」語る（下一七九）。許しを求める木島に「今頃反省したって遅いのに、何をくだくだと考えているのでしょうか」と言い、むしろ「お姉さんの名前は忘れましたが」と言う木島の言葉にまた傷つき、憤慨するユリコの姉。木島の手紙はしかし、本人のミツルに「あなたに貸した手紙を思い出していたら、とても懐かしくなってしまって〔先生に〕会いにいったの」と言わせているように、ミツルと木島が友好を深める機会をつくるきっかけになる。また、次の公判の時に、「私」がミツルに返す目的で持って行った先生の手紙を、偶然会った息子の高志に、読ませてとせがまれて貸し、高志をして「私はさっき、年取ったオヤジの手紙を読んで泣けてきましたよ。まだあのことに囚われているのかってね」（下二〇六）と言わしめる。木島がミツル宛てに書いた手紙に対する三人三様の反応がそれぞれの現在の心境を映しだす鏡のような役割をしていると言えよう。

二度目の公判で紹介されて始めて会う、ユリコの息子でめくらの美少年、百合雄を家に引き取ってからしばらくして「私」をミツルが訪ねてくる。木島先生と結婚することになった、という報告とともに、息子の高志のところに和恵が死ぬ前に送ってきたという日記を預かってくれと頼む。ミツルは和恵の日記は、是非「私」が読むべきだと思う、と述べ、その理由をこう説明する。「私」は表面上は馬鹿正直な和恵を軽蔑して笑い、「悪意」を持って生き抜こうとしていたようだけれど、本当のところは「私」と和恵は「とってもよく似ている」（下二二六）。どうして和恵と「似ていること」に気づかないかと言えば、それは「私」が「何者とも対峙していないから」だ、と言い、暗に和恵の日記を読むことが自分の「弱さ」と対峙するきっかけを作るはずだと主張する。しかし、日記の意義についてのこの主張は聡明なミツルの理性的な解釈であり、書いた本人の和恵が意図していたものとは全然違うのだ。

身長一六五センチ体重四五キロ、というがりがりに痩せた四〇歳間近の体にトレンチコートと髪の長いかつら、それに真っ赤な口紅という井出達で渋谷の娼婦街をうろつく和恵。トラジコミックな幻想の世界に生き続ける和恵の日記はこう締めくくられる。「今、あたしは家に帰って、このノートを開いている。日記を書くのはそろそろやめにしようと思う。売春日記なのに、客が付かない日が増えたからだ。だから、木島君。あなたにフォーユー。高校生の時に送ったラブレターみたいに返さないでください。これもあたしです」。和恵が書いた木島宛の第二の「ラブレター」はまたしても木島の手元にはとどまらず、ミツルを経由して「私」に読まれ、オリジナルの趣旨とは違う読みが与えられる。

ミツルの言葉に動揺しつつ和恵の日記を読んだ「私」は「和恵のあまりの寂しさに、そして超人ハルクも驚くほどのグロテスクな変貌ぶりに、さすがのわたしも涙を禁じ得ないのでした。」（下四二六）と告白する。ミツルが予告したように、和江の日記はユリコの姉にとって鏡のような役割を果たし、和恵のもろさをみつめることによって、いままでの自分の語りを脱構造するかのような自己認識を彼女にもたらす。そして最後に、ユリコの「売春」を不潔だと言い、「区役所勤めのまじめな私にはたえられない」と永遠の処女を謳うかのように語っていた「私」はつきものが落ちたかのごとく甥の美少年百合雄とともに渋谷の娼婦街に立つように

なるのだ。

テクスト装置としての「書簡性」

これまで『グロテスク』という小説のなかで、ダイアロジックな書簡性がどのように主人公「私」の「語り」を現在進行形で形作ってきたかを見てきた。美貌の妹ユリコのせいでどれだけ自分が差別され苦労し続けてきたかを「世間」にむかって訴えるという「私」の当初のスタンスが、時間をおってユリコの手記、恩師の手紙、和恵の日記、を読むことによって、またその解釈をめぐるミツエとの対話によって、いろいろに変化していく。テクストの「書簡性」によって主人公「私」のとってきた複雑な軌跡が見事に浮き彫りにされる仕組みになっている。

しかし忘れてならないのは小説内で浮き彫りにされるのは「私」というナレーターから「世間」というナレティーへの伝達軸だけでなく、内包された作者「桐野」から読者への伝達軸でもあるということだ。ユリコの姉が世間に宛てた「手紙」は「作者」桐野が読者に宛てた「手紙」でもある。登場人物のメタ言語が交錯するなかで常にコンテクストがずらされていく、複雑な「書簡性」を持った文章でつづられるこの物語をどう読むか。特に最後まで「世間」や読者を挑発し続ける姉の謎めいた「信頼できない語り手」ぶりをどう解釈するべきか。最終的には「ユリコも和恵もミツルも、高志もチャンも、『わたし』という人間の一部であったかもしれない」（下四四二）と言い放つナレーター。彼女のそれまでの語りの現実性を否定するようなこの発言は、今までの出来事は全部彼女の頭の中でつくられた虚構であったのだと言うかのごとく、読者を一瞬メタフィクション的な想像力の世界に誘いこむ。この小説の結末に、いわゆる真実の表象や決定的な解釈の不可能性を読むか、それとも、現代日本社会の歪んだ社会事情を浮き彫りにする社会リアリズム小説と読むか、スリルたっぷりの娯楽推理小説と読むか、数多くの可能性がある。

東浩紀は二一世紀的な想像力の環境を「ひとつの物語を前にしても、つねにほかの結末、ほかの展開、ほかの」主人公の姿を思い浮かべてしまうような、携帯小説、ブログ小説、ゲーム小説などが氾濫する想像力の環境という風に位置づけているが、書簡小説というクラシックなジャンルの「書簡性」にも「メタ物語的想像力」と呼応するものがあるのではないだろうか。[8]「書簡性」は、図らずも、複数の物語の担い手が多数の物語を競いながら紡いでいく二一世紀的な想像力の環境事情について示唆するところがあるという点で、時事性に富む概念でもあると言える。

『グロテスク』は、いわゆる「東電ＯＬ殺人事件」と呼ばれる、九七年に実際に渋谷の円山町で起こった売春婦殺人事件の被害者の女性をモデルにしているので話題性もあり、社会的リアリズムの小説として、日本の社会のゆがみやもろもろの問題をとくに女性の立場から訴え、いわば断罪する小説として読まれやすい。ともすればテーマにひきずられやすいこういう社会派ミステリーをむしろテクストの「仕組み」（書簡性）に焦点をあてて、念入りに読む機会を与えてくれたシンポジウムの「テクストに返る」という精神に感謝の意を表したい。

注

① 仏訳の初出：«Gurotesuku de Kirino Natsuo : Lettres, Carnets et journaux intimes comme dispositifs textuels, » *Etudes Japonaises, textes et contextes*. Commemoration du 50e anniversaire de la fondation de l'Institt des hautes etudes japonaises du College du France, Sous la direction de Sekiko Matsuzaki-Petitmengin, Cecile Sakai et Daniel Struve（College du France, Institut des hautes etudes japonaises, Paris 2011）.

② Janet Gurkin Altman, *Epistolarity : Approaches to a Form*, Columbus, Ohio; Ohio State University Press, 1982.

③ Altman はこれを "The epistolary seizures" と呼んでいる（三七）。

④ 本稿の引用は『グロテスク　上下』文春文庫、二〇〇六年による。ユリコの日記を手に入れるのが一審の初公判の一週間ほど前であり、姉はあきらかにユリコの日記を初公判までに読んでいる。小説の始まる時点ではユリコの手記を読んでいなかったと考えられるので、小説の始まる時点での「現在」は初公判の一週間より前であったことが推測される。

⑤ Judith Butler, *Undoing Gender*, Routledge: 2004, p. 2.

⑥ Judith Butler, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, Routledge: 1997, p. 36.

⑦ 第五章はユリコを殺したことを自供した中国人の移民労働者、チャン、の上申書である。

⑧ 東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生：動物化するポストモダン2』講談社、二〇〇七年。

（オスロ大学文化研究・東洋語学科教授）